

童児神のコスモロジー (I)

赤尾 裕久

(I) 方法

日本の民俗学が学として確立した当時（昭和10年前後）、柳田国男は民間伝承論を「明日の学問」として展開した。その中で彼は多くの学問が既に年たけているのに独り民間伝承論のみが今尚至って頑はない一本の稚樹だとし、三つの重要な問題提起をしている。

(1) 目的；民間伝承の採集と処理によって得られる知識がほとんど人類文化史全般に及び得ること²⁾、よってこの事実認識を基礎に社会科学としての文化論が再検討・再構成される必要がある。

(2) 方法；既存の「記録文書」「文字の史料」に頼る以上に今一段と深く問題を掘り下げて行こうとすれば、新しい方法のすべてを総括した「人を一種の存在として考察する」広義の人類学的方法

法——人間の姿形として伝わっている史料、常民の無意識、伝承した無形の遺物・遺蹟の上に乗って手を伸ばそうとする文化人類学・社会人類学の方法——をとらざるを得ない。

(3) 研究領域分野；(a)目によって捉えられる有形文化——生活外形・目の将来・旅人の採集生活技術誌（土俗誌）、(b)耳と目によって伝えられる言語芸術——生活解説、耳と目の採集、寄寓者——者の採集——土俗誌と民間伝承論との「境の市場」、(c)心と心とが通じ合わなければわからない心意現象——生活意識、心の採集、同郷人の採集——地方研究、文字の教養なき僻村の住民の間に何時の世からともなく伝わっているくさぐさの口碑、殊に形態の稚拙なる昔話や歌物語、素朴にして力強い仕事唄、恋歌の類……昔話や民謡は林の奥の珍しい蕈のようなものである。色彩鮮麗な野の花である。

……昔話や民謡は林の奥の珍しい蕈のようなものである。色彩鮮麗な野の花である。

半世紀以上の年月を経た今日、尚日本民俗学の研究が未だ混沌の状態から抜け切っていない感があるなかで、柳田学の評価は民俗学のなかでよりも、その隣接諸科学の境界領域において民俗学の成果を踏まえた研究の新生面を開きつつあるのが現状である。民間説話の研究も深層心理学的の研究と共に今や心意現象の学として歴史人類学的アプローチが不可欠となっている。

歴史の深層へと関心を向けるにつれて、その視点・方法が人間諸科学のなかでも人類学や民俗学（さらには民族学）のそれと重なるのは、わが国のみならず、世界的動向として当然のことであろう。

フランスのアナール派、ジャック・ルゴフ (Le Goff) は深層歴史学とも言うべき視座から、メリュジーヌ説話の分析をエマニュエル・ルオアニラデュリー (Emmanuel Le Roy Ladurie) と共同執筆し、民間説話研究の方法論的意義を次のように述べている。

「だから、構造分析（及び比較史）は、虚偽の歴史主義を片づける助けとなるとすれば、それらはまた、かたちばかりでなく変化を遂げる内容をも考慮に入れた場合には、それらの分析の対象となる説話がもはや実際に起ったこととの関係においてではなく、社会とイデオロギー自体の構造との関連で歴史的に果たした役割をより一層明確にすることを可能にする。ここでの虚偽の歴史主義というのは、説話や伝説の出来事中心の歴史、説話または伝説の

説明、もつと悪いのは起源を実際に起った出来事や歴史的人物の中に求めようとする傾向を指す³⁾。

このメリュジーヌ説話の分析は、「アナール」誌の「歴史と構造」特集に寄せられたもので、前半の論旨は、本来、豊穣母神のイメージを体現する筈だったメリュジーヌがキリスト教的世界の中で、半ば否定的な異人と化してしまふ。しかし、大地に対する繋りを欠く騎士の世界は大地の豊穣と子孫の繁栄を保障する母神の豊穣を仲介しなければ、土地の精霊と和解することができない。つまり、男性原理を秩序の中核に据えるキリスト教的世界の中で、より長い時間の軌跡の中に息づいている女性原理がどのようにに説話を介して構造的に組み入れられるかという点を、精神史の観点から明らかにしている。

後半は、十六世紀～十九世紀に至るメリュジーヌ説話の変遷を地方の民間伝承の記録を基に跡づけ、先の十二～十三世紀のメリュジーヌ像との比較考察及び分析である。十七世紀以降になると、メリュジーヌはリニエツジ（単系親族）集団の多産な保護女神としてよりも農耕の保護者としての側面を強めて行く。例えば、豊凶の予兆を示す泉がメリュジーヌの泉——メリュジーヌが変身する際に水浴びをした場所というイメージから、この泉の水の出方次第で豊凶が占われる——といった兩義的空間と神話的思考を介して切り結ぶことに現われる。

尚、このメリュジーヌ説話は、水界の女性が人間の男と結婚し、

男がタブーを破ったため、動物あるいは妖精の正体が現われ、恥じて水界に戻る話で、ゴルベーフによれば、スキタイからインド・インドシナへ入ったとみられ、大林太良はこの型の話がインドシナ・中国・朝鮮・日本に発達していると指摘した。ギルの「南太平洋の神話と歌謡」にも同じ話型とみられる「泉の乙女(タパイル)」がある。

わが国の人類学者、小松和彦も民間説話は「民衆の歴史意識の一つの結晶」「民俗的記憶装置」であり、「民俗学は民衆の精神の考古学」だとし、東北・陸中地方に伝わる「竜宮童子」の話型を手がかりに、その伝承の依代に馮依し、隠れ潜んでいる民衆の歴史の記憶を構造分析している。⁽⁴⁾

われわれは、ルゴフや小松和彦も試みた形態論的構造分析をはじめとするさまざまな民間説話の研究が各話型について可能となるよう基礎的な資料集積の作業にここ十年來追われてきた。南は沖縄から北はアイヌを含む日本全土に埋もれている約六万話にのぼる貴重な資料を掘り起こし、世界的視野での比較研究を進めることは、今後の民間説話の学術的視圖を一層大きくきりひらいていく上で不可欠の作業であるとの確信のもとに、先ず基礎研究の一環として、共時的(synchronique)観点からの資料集積の作業があった。⁽⁵⁾これは後の通時的(diachronique)観点からの歴史的研究の前段階に位置づけられるものである。

資料集積と並行して、当面、次のような個別研究がある。

- (1) 調査資料を伝承圏別に通観して、各々の圏内で民間説話がいかに生息しているか、その伝承文芸的形像の風土性を解明する。
- (2) 民間説話の伝承と形像的特殊性(モチーフ・話型)を世界民間説話のそれと比較検討して、日本民間説話の国際的レベルでの相対的位置づけをするなかで、日本人の文芸的創造能力を究明すると共にその生活史的考察をする。
- (3) 民族的個性と人類的普遍性をあわせもつ民間説話の骨太の間像、及びそれをはぐくみ育てた基底文化の探求をする。

本稿では、童児神が中核モチーフの一話型、「竜宮童子」に焦点をあて、童児神のコスモロジー研究の端緒としたい。

(II) 童児神のモチーフ——竜宮童子をめぐる

童児神のモチーフについては、(1)柳田国男の「海神少童」伝承の研究、(2)石田英一郎の母子神仰の比較民族学的研究序説、(3)吉田敦彦の「小さきとハイヌウエレ」、(4)カール・ケレーニ(Kerenyi, K.)とグスタフ・ユング(Jung, C. G.)「神語りの本質序説」等の古典的研究によって、次第にその世界的レベルでの形像が明らかになってきている。益田勝美の「久遠の童形神——イメージの化石を掘る——」は「記紀神話」の海神ニ少童命について興味ある考察をしている。

先述の石田英一郎は母子神複合を水界に関連させながら、次のような三つのモチーフの結びつきを解明した。(1)何らかの形で人

間に福德をもたらす水界出自の少童神、(2)その少童の異常誕生、(3)少童の像に付き添う女性。

この水神少童説話は西南太平洋から広く沿太平洋諸民族に分布した一系統の古代信仰圏に包接しうべき宗教的・神話的表象である。

日本本土と琉球列島の全域において、様々な名で知られている靈童の存在、竜宮童子はエビス、少名毘古那の小さ子に関連しており、その多くが小さく、醜く、無格好で、特別な欠陥を備えている。アウエハント (Ouweland, C.) によれば、こうした少童たちが、河童、雷童口蛇や竜の子と見なされており、エビス神のように留守神や竜神として現われることもある。

母子神複合が水辺から山へ移されると、靈童に備わった典型的な両義性が強化・拡大される。つまり、構造的にみれば、小さく無格好で欠陥のある不具の水神少童と、力持ちの異常な早熟児で信じられない力業をみせる山の巨人ないし英雄とは、共に同一の関係性の二つの極に位置づけられる。小太郎伝説はそうした場合に過渡的な段階が両極端の間を仲介する動きをする。世界の童児神をみても同様のことが言える。例えば、カレワラの「クッレルヴォ」、リグ・ヴェーダの「黄金の胎児」、マハーバーラタの「ナーラーヤナ」etc.

クッレルヴォイネンの異常誕生・異常成長の形象の多様性を「カレワラ」第31歌に見ると次の如くである。

父を失った幼児クッレルヴォイネンは揺りかごの中に入れて寝かされた。幼児はゆすぶられ、揺りかごは揺れた。頭髮が逆立つほどゆすぶられて、一日目、二日目を通したが、第三日目になると幼児は双の足をふんばって力強く産着を蹴やぶり、布団を這い出して、揺りかごを微塵に踏みつぶし、産着を引き裂いた。幼児は小さな樽に詰め込まれ、満潮の海に投げ込まれ沈められた。……幼児は樽から脱け出して、波の背に座り込み手にした銅の棒の先端に絹糸をつけ、海面を端から端まで漂いながら魚を釣っていた。……

幼児は炎々たる猛火の真中に投げ込まれた。一日燃え、二日燃え、三日目も燃え続けた。幼児は膝まで灰の中につかかって座り込んだなり、くすぶった火の中に腕を突っ込んで、火力を強めんと火掻棒で炭火を掻きまわしていた。髪の毛一筋も焦がさず、巻き毛一本も焼けずに。……樹の木に縛ってぶら下げた。幼児は両手に棒を持って、木々に絵を刻みつけ、木という木はすべて絵でいっぱい、樹の木は彫り物の飾りでいっぱい。

この不幸な星の下に生まれた幼児を殺すのに誰がウンタモイネンに手を貸すというのだろう。ウンタモイネンがどんな死を用意しようかと、どんな破滅を企てようと、この悪戯児は破滅に至らず、殺されもしない。

「始原孤独」としての幼児の運命は、成長後、様々な難題を彼に課す。クッレルヴォイネンこそ他ならぬヘルメースであり、ディ

オニユーススであることがわかる。

ナーラーヤナは「水をすみかとする者」の意で、童児神の顕現の場所が水である時、魔力をもった孤児の原像はそこに完璧な意味を表わす。

リグ・ヴェーダの「黄金の胎児」（ヒラニア・ガルバ）は創造神の唯一の生氣として顕現した。「深大なる水（泉水）」が一切（万物）を胎児として孕み、火（熱）を生みつつ来たるとき」と歌われるように。

童児神と水界との密接なかわりを、一話型、「竜宮童子」を通して具体的に見て行きたい。「竜宮童子」は「沼神の又使い」「黄金の斧」と共に海神の贈物を主題にした話型群で贈物の種類によって、(1)竜宮小槌、(2)竜宮子犬のサブタイプがある。「浦島伝説」では、永遠の若さを秘められた箱であるが、この系列の昔話における贈物は富そのものではなく富を産み出す呪宝の小槌であり、小動物犬猫である。

柳田国男は「薪を竜宮に献上した」という話は、山に柴刈る老翁として、そう説くのが自然であったというにすぎぬと思うが、それでも起こりは古かったと見えて、南北にその例が数多く分布している」と指摘した。

まず、北の竜宮童子の具体例として宮城県の典型話とそのモチーフ構成を例示する。

竜宮童子——しようとく

登米郡南方町青島・男

むかしむかしあつとくに、たいそう信心深くて気のええおじんつあん、あばんつあんが、いたんだと。おじんつあんは山がらお門松（歳徳様の松）迎えて来るとき、途中の川さ、「竜宮様さ上げ申す」て、毎年お松を上げ申してだんだんと。ある年取りの晩げ、口の曲がった。めぐせえやろこ（醜い男の子）がやって来て、「おらあ、しようとく、というもんだげんとも、どうぞ、おえでけらえん」て言っただと。おじんつあんが、「この通りの貧乏でやつと食ってんで、とつてもおがれえん」て言ったら、やろこが、「おらあ飲むも食うもすえん（しません）。庭の隅すみこさむしろかぶつて寝るだけであえから、おえでけらえん」て言うもんだがら、仕方なく、おえだんだと。

次の朝ま、おじんつあんが目ましましたら、ふわとした絹蒲団を着てビガビガな家さ寢でだんで、たんまげてしまつて、「ばばや、なしてにわがにこえなビガビガな家さ寢でだんだ」て言ったら、おばんつあんもたんまげで、「よそさまの家でねえべね」て言っただと。そこさ見たごどもねえ娘がやって来て、「お目覚めですか。おらあ、今日からこの家の嫁ごにしていただぎすた。御飯でぎだから、おあがんえん」て言っただと。おじんつあん、おばんつあんが、狐にしかされだんだ（だまされた）でねが、

と思ひながらそとさ出でみたら、ぶっこれ小屋（あばらや）がなくなつて、立派な家が建つてんだと。ほうして、見たごとのねえ男が、そばき寄つて来て、「おはようござります。おらあ、今日からこの家の習にしてくださいすた。さあさ、御飯おあがんなえん」て言つたんだと。ほうして、うんとおどりもち（接待）されんだと。それがら、おじんつあんと、おばんつあんは、なに不自由なく暮らすようになったと。そのうちに孫も生まれんだと。

ところが、一人のうちほえがったげんとも、三人四人と増えたら、兄弟喧嘩ばりするんで、おばんつあんが、「おめえだち、なして喧嘩ばりするんや。しょうとくが悪いな」て、口癖のように言つてんだと。ほうしたら、ある日のこと、何年が前におえでけるて来たやろこが、庭の隅こがら出で来て、「おばんつあん、おばんつあんが、いづもしょうとくが悪い、しょうとくが悪い、て言うがら、おらあ、出で行くがら」て言つたんだと。おばんつあんがたんまげで、「おらあ、すっかりおめえのこと忘れでだ。おめえのごと言つたんでねえ」と言つたら、やろこが、「おらあ、毎日毎日聞ぎだぐねえがら、出で行くがら」て、さっさと出でつてしまつたんだと。次の朝ま、おじんつあんとおばんつあんが目さましたら、もとのぶっこれ小屋と藁蒲団を着てだんだと。ほだげんども、しょうとくのお蔭で、何年も楽しく暮らすことができたんで、しょうとく顔を彫つて、毎日、拜んだんだと。そ

れがいまの火男（かまど神）なんだと。ひよつとこの面も、しょうとく顔をまねで作つたもんだと。こんで、えんつこ、もんつこ、さげだどや。（永浦 p.152）

〈モチーフ構成〉

①信心深い爺が山から門松を迎えてくるとき、毎年途中の川で竜宮様にあげていると、ある年とりの晩にしょうとくという醜い男の子が置いてくれと言つて来たので、庭の隅にむしろをかぶせて寝させる。〔参照 VI.62.1 水の女神を崇拜する〕

②翌朝、爺婆が目さしてみるとりつばな家に住んでおり、見たこともない娘と男が、嫁と婿だと言つて現われ、爺婆は大事にもてなされてなに不自由なく暮らす。〔28 信心が報われる〕

③孫が三、四人になると兄弟げんかばかりするので婆が、「しょうとくが悪い」とくり返し言うと、庭の隅からあの醜い男の子が現われ、毎日しょうとくがわるいと言われるのがいやだからと出ていってしまふ。

④翌朝、爺婆が目さしてみると、もとの小屋にわらぶとんで寝ているが、何年も楽しく暮らしたお札にしょうとく顔の顔を彫つて毎日拜む。〔参照 VI.112 石の偶像を崇拜する〕

⑤それがいまの火男で、ひよつとこの面もしょうとく顔をまねで作つたものである。

水界からもたらされた童児神「ショウトク」は、釜神、火男でもあり、釜神起源譚のヴァリエーションの一モチーフと見ることできる。

小松和彦が指摘するように、家の富裕化の源泉たる釜神の前神を社会構造的劣性及び肉体的、行動的劣性を身に帯びた人間、つまり聖痕を持つ人間に求めようとする点がこの伝承の核心モチーフである。「まれびと」「異人」と異形性ととの深い結合、それを神聖視、神格化する思考、そしてそこに富の起源を見ようとする思想は、折口信夫や山口昌男も説くところである。柳田国男も岩手県江刺市の「ウントク譚」を引いて同様の見解を述べ、「女性が現われて水の都の居住者の満足を語ったこと……日本の竜宮はまたいずれの国とも別なものであった。ひとり神秘なる蒼海の情報とを伝えた者が殆んど常に若い女性であったというにとどまらず、更にまた不思議の少童を手を抱いて来たって人の世の縁を結ぼうとしたのも彼らであった。海はこの国民のためには永遠に妣の国であったということがいえるのである。」¹⁰と言及している。

次に兩の具体例として、熊本県の「はなたれ小僧」の典型話と、長崎県の「竜宮のみやげ——呪宝神」(対馬)の典型話を例示する。

竜宮のみやげ——はなたれ小僧

(原題・はなたれ小僧様)

熊本県阿蘇郡小国町・男

昔、福岡県大和郡に真弓という村がありました。ここに一人のお爺さんがいて、毎日毎日、山に行つて、薪を取つて来ては、南

の関という、町に売りに行き、暮しを立てていました。

ある日、とうとう薪が少しも売れませんでした。町の中の橋の上から薪を投げ、「竜宮様に上げます」と言つて拝みました。すると川の中から美しい女が出てきて、「お爺さん」と呼び止め、抱いていた小さい子供を出して、「この子は、竜神様があなたに上げるものです。毎日毎日エビのナマスをこしらえて上げなさい。この子に折れば、何でも思うままになります」と言つて、川の中に入つて姿は見えなくなりました。お爺さんはたいへん喜び、その子を抱いて真弓の里に帰りました。神様の横に小さな小僧様を据えて、毎日毎日エビのナマスを供えて、大切に育てました。錢でも米でも、ほしい物はこのはなたれ小僧様に頼むと、鼻をかむような音がすると、すぐほしい物で出て来ます。家が古いので、お願いすると、家が新しく建ちました。道具も、倉も、なにもかも揃つて、一寸の間に、大金持になり、薪とりもせず、ナマスを供えるだけで、楽な暮しになりました。

ところがお爺さんはたった一つのエビのナマスを作る事が面倒になり、はなたれ小僧様を棚からおろし、「私はもう何もお願いするこつものうなつたけん、どうか竜宮に帰つて下はりませ」と言いました。すると、小僧様は黙つて出て行きました。鼻をすする音がしたかと思うと、家も倉も、道具もみんな、消えてなくなり、もとのあばら家になってしまいました。

竜宮のみやげ——呪宝袖

(原題・竜宮の袖)

長崎県対馬地方・女

むかし、おじいさんとおばあさんがいたつちなも。おばあさんのお正月になつても餅も搗えんでな、で、「おじいさん、何かお金を。働いてこんね」というて、いわれたそうです。おじいさんは、「いてこう」ちゅうて、もろもくちゅうてなも、(お正月のものの上にすえますと)もろもくを山にとりいてな。そして、もろもく売りにてこうちゅうて、いかれた。そしてもろもくとつてきて、売って回つても、おそいもんじゃけ、もうだれも買うてやることがでけん。そいじゃから、「どうしようか。もろもく売られやせんがどうしようか。もう、流そう」ちゅうて、海のそばに行つて流されたそうですよ。「こんなにあつて何も働きを何もできません。竜神様にさし上げます」ちゅうて流されたそうですよ。そしたら、「もう、あすこまで流されていたばい」ちゅうて見てござつた。そしたら沖の方からですね、もろもくに乘つてですね、お姫様がござつたげな。乗つてきて、そして「あらあ、うち流したもろもくの上に、まあお姫様か何かが乗つてござつたよ」ちゅうて、おじいさんこう見てござつたとですたいな。そしてそばにだんだんだんだん寄らっしゃつてなも。「おじいさん、おじいさん。お金がのうてはできませんすまい」て、「私が片袖をさ

し上げましよう」「そしたら何でも自分の良い品をば、いただこうと思えば袖を振れ」つていわつちやつたげな、なも。

それで、家へ帰つておばあさんに、「なんがいいな」ちゅうて、いわつちやつた。「米がええ」ちゅうとですなも。だれもない所行つて袖振ると、米が出て来るつとですなも。「おばあさん、おばあさん。はいお米じゃ」ちゅうて、なも。喜んで、喜ばつちやつて、「人のいらんとこに置いとけよ」ちゅうてで、そん、だまつて、他にはだまつちよつて。そうすれば又、おばあさんが、「今度はお金」ちゅうてなも。「はい、はい」ちゅうて、振るとお金がかまつとですよ。「何でもこんおじいさんは、いへはすぐ、そん、お米でんお金でん、そん来る。不思議な事じゃ」ちゅうておばあさんが思わつちやつた。

おじいさんがるすにおばあさんが、おじいさんの所に見てみらつちやつたげな。ほしたらきれいな袖があつたそうですよ。「おうおう、おじいさんな、まあ」ちゅうてですね、そんやぐもち焼いたとでしようね、袖をば焼かっしゃつたげな、なも。そいで、おじいさんが帰られたから、「おじいさん、お米が無いけ、お米をすぐ」ちゅうていわつちやつたげな。「はい」ちゅうてすぐおじいさん自分のへやに行て、そしてみてもみても無いちゅう。それで、「ああ、おばあさんよ無い袖は振れん」いわつちやつたそうですよ。だから、そん、やくもちするもんじゃないちゅうとですね。そんばっかりとうざぶろう。(昔話伝説

長崎の話は、童児ではなく、呪宝であるが、熊本の「はなたれ小僧様」は童児神で、しかも美しい女が小僧を抱いて来て手渡すところが、「産女の話」と重なっている。産女が現われる場所は湖の上、池の堤、橋の袂など水の神と縁がある。柴を投げ込んだのが湖の渦巻でなく、山中の穴となっていることもあるが、「枕貸し伝説」を始めとし、岩屋に水の神の信仰が移っている例は他にもある。

熊本県の北の境、南関の町にも古凡な「はなたれ小僧様」が語られている一方、南の八代郡松求麻村では、後半が「米倉と小盲」の話になっている。海神の贈物が呪宝の打出の小槌で、米と言ってその槌を打つと米が出、それを入れるために倉と言って打つと、また忽然として倉が建つ。隣の爺が小槌を借りて帰り、わずかな間になるべく多くの米と倉を出そうとして、急いで続けざまに「コメクラ、コメクラ」と言って打ったら、たくさんの小盲が現われ、ついに欲深爺は責め殺されたとなっている。この地方は久しく肥後検校という琵琶弾きの徒が住んでいた土地であることから柳田国男が指摘する如く、視覚障害者の語り手の関与が考えられる。別話型「竜神の予告——人と超自然」でも、盲目の琵琶法師が竜神と通じており、座頭と水底の神霊・大蛇と親密な関係が伺われる。

(1) 柳田国男「定本柳田国男集」第25巻 p.331, 1971

(2) 「誠に先生も指摘していられるように、わが国はかかる説話や信仰の研究にとっては、比較しうべき眼前の資料に豊かに恵まれた最適の土地柄であった。日本のように例えれば同じ一つの昔話が少しずつ姿を変えて隔々にまで分布し、僅かな骨折をもつてその数を二十にも三十にも増すことができ、よく説話要素の新旧とその成長の過程とを跡づける国はいったって少ない。故に私は柳田先生の昔話研究の成果などは、開け過ぎたヨーロッパ大陸の説話学者が解かんとして解き得なかつた幾多の問題に極めて貴重な解決の示唆を与えうる点において国際的な意義をもつものと信じてゐる」石田英一郎

「桃太郎の母——ある文化的的研究——」p.190, 1986 講談社

(3) 山口昌男「歴史人類学或いは人類学的歴史学へ——ジャック・ルゴン——歴史学と民族学の現在」をめぐって——『思想』vol. 630 p.25, 1976

(4) 小松和彦「神々の精神史」p.15, 1978 伝統と現代社

(5) 稲田浩二・小沢俊夫・赤尾裕久他「日本昔話通観（全28巻）」1990 同朋舎

(6) Thompson, S. Motif-Index of Folk-Literature, six vols. third printing, Broomington & London, 1975

(7) Aarne, A. & Thompson, S.: The Types of Folktales. FF Communications, vol. LXXV, No. 184, 3rd printing, Helsinki, 1973

(8) 柳田国男「海神少童」p.55「桃太郎の誕生」所収

(9) 稲田浩二・小沢俊夫・赤尾裕久他「日本昔話通観 vol.4」p.225~227, 1982 同朋舎

(10) 柳田国男「海神少童」p.64「桃太郎の誕生」所収

(11) 稲田浩二・小沢俊夫・赤尾裕久他「日本昔話通観 vol.24」p.107~108, p.100~106, 1980 同朋舎

(12) 柳田国男 米倉法師1881「桃太郎の誕生」所収

(あかお・やすひさ、障音児教育、岡山大学教授)